

今治市中心市街地における都市形成過程に着目した地域住民の景観価値認識の特徴

Characteristics of Residents' Perception of Landscape Value Focusing on the Urban Formation Process in the central area of Imabari City

車谷綾花*・福島秀哉**・福井恒明***

Ayaka Kurumaya, Hideya Fukushima, Tsuneaki Fukui

In recent years, challenges of population decline have become apparent, highlighting the need for resident-led community development that leverages regional characteristics. In areas with fragmented spatial contexts, capturing a context has gained importance. Furthermore, as resident participation is promoted through initiatives as area management, interpreting social characteristics and reflecting them in planning has become essential. This study clarifies regional characteristics relevant to urban development by analyzing the urban formation process, evaluating community activities in Imabari City, and correlating these with residents' perceptions of landscape values. Relationships between spatial characteristics and landscape values reveal distinctive perceptions linked to each place's period of formation and the multiplicity or singularity of urban functions.

Key word: Central Areas of Local Cities, Castle town, History of Urban Formation, Landscape Value, Public Participation GIS, Imabari City

地方都市中心市街地, 城下町, 都市形成史、景観価値, PPGIS, 今治市

1. はじめに

(1) 背景・目的

近年、地方都市の中心市街地の多くでは、モータリゼーションの進展や消費生活の変化など、複合的な社会経済情勢の影響による空洞化が進んでいる。中心市街地を含む地域再生に向けては、地域固有の空間特性や社会特性(以下:地域性)をいかした、官民連携での持続的な取組みの必要性が指摘されている¹⁾。

空間特性について、日本の地方都市の中心市街地は、城下町、宿場町といった近世都市を基盤とするものの、その後の近代都市計画や戦災復興、高度経済成長期などを通して大きな空間的变化(空間的な文脈の断絶)を生じているケースが多い²⁾。地域性をいかしたまちづくりに向けて、このような空間的な文脈の断絶が起きた地域でも、過去の地図の復元による都市形成過程の分析等を通して、歴史的資源としての連続的な地域の文脈を掘り起こす重要性が指摘されている³⁾。

一方、官民連携と社会特性の関係に目を向けると、エリアマネジメント等、地域住民をはじめ民間のまちづくりへの主体的かつ継続的な参画の必要性から、地域の社会特性の計画プロセスや計画内容への反映の重要性が高まっている⁴⁾。

地域の社会特性の一つの表象である地域住民の環境認識(Environmental Cognition、以下:EC)は、ソーシャルキャピタルの醸成や近隣コミュニティの結束など⁵⁾、地域の持続的な取組みを伴う計画への影響が指摘されている。ECの具体的な指標の一つに「景観価値(Landscape Value)」がある。景観価値は人々が環境に対して抱く主観的な意味や重要性をその性質に応じて分類した「場所が持つ価値の類型」と定義され、景観価値の認識の高まりは、地域への主体的参画と関連する地域愛着の醸成⁶⁾に影響することが指摘されている⁸⁾。また景観価値は住民参加型GIS(PPGIS)等の手法を通して、空間特性との関係性を議論できる点が特徴である。

以上より本研究は、日本の地方都市の中心市街地におけるケーススタディとして、対象地の都市形成過程の分析と現在の地域住民の景観価値認識の特徴を関連付け、まちづくりに向けた地域特性を明らかにすることを目的とする。

本研究の対象地は、近世城下町を基盤とし、近代化による産業の変化や戦災復興等による空間的な文脈の断絶がみられるなか、官民連携による中心市街地の再生に取り組んでいる愛媛県今治市中心市街地とする。

(2) 今治市中心市街地の概要

今治市中心市街地の概要を図-1に示す。今治城を南端に南北方向に整備された近世城下町を基盤に発展したが、戦災復興ではそれを東西に横断するかたちで広幅員の戦災復興道路(広小路が整備されるなど都市構造の改変が行われた。その後も産業、行政機能の集積に加え、今治駅と今治港間の人の往来により商業地として発展したが、近年は人口減少に加え、1999年のしまなみ海道開通により定期旅客航路が廃止されたことで人の往来が減少し商業機能も著しく低下している。現在は「今治市中心市街地グランドデザイン¹⁾」の策定など、中心市街地再生に向け、官民連携によるまちづくりが推進されている。

以上より、今治市中心市街地の都市形成過程の分析や地域活動を把握し、現在の地域住民の景観価値認識の特徴を関連付け、まちづくりに向けた地域特性を明らかにすることは、共通課題を有する日本の地方都市の今後のまちづくりににおいて重要な知見を提供すると考えられる。

(3) 既往研究と本研究の特徴

地図復元等を用いた都市形成過程の分析では、明治期の地籍図と旧土地台帳等から歴史的な都市空間を復元しその特徴を明らかにした研究がある³⁾。また宮脇は、土地利用の変化から景観の「時間的奥行き(Time-depth)」を評価する歴史的景観キャラクターライゼーション(Historic Landscape Characterisation)の

*学生会員 株式会社都市環境研究所 (Urban Design Institute)

**正会員 九州大学大学院比較社会文化研究院 (Faculty of Social and Cultural Studies, Kyushu University)

***正会員 法政大学デザイン工学部 (Hosei University)

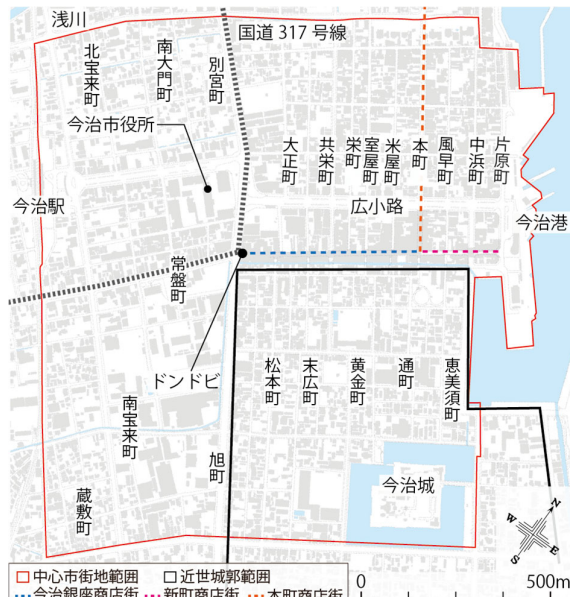


図-1 今治市中心市街地の概要(国土地理院の基礎地図情報)

手法により、都市の歴史的価値の評価を試みている。

地方都市中心市街地に関する研究では、人口減少による地域の衰退に対し、増加する低未利用地の活用に関する研究¹⁰⁾や回遊分析に関する研究、地域資源の活用に関する研究¹¹⁾等がある。

今治市に関する研究では、伊藤がシビックプライドに関する言説を概観し地域参画、地域アイデンティティ、忠誠的愛郷心、地域愛着の側面があることを整理した上で、今治市における都市環境の価値評価とシビックプライドの関係を明らかにしている¹²⁾。そこでは「中心市街地」の都市環境の価値評価が高いと「参画」「持続願望」意識が高まること、「新規整備」の価値評価は直接的にはシビックプライドに繋がらないこと、今治市に対する忠誠的愛郷心は抽出されなかったこと等が指摘されている。また今治市役所など丹下健三設計の公共施設群の市民広場の歴史的変遷を都市空間形成の視点から分析した研究¹³⁾¹⁴⁾がある。以上、今治市の地域性を論じた研究があるが、中心市街地を対象に、都市形成過程の分析と現在の地域住民の景観価値認識の特徴を関連付けて考察した研究は行われていない。

住民の意向や認識を空間データに可視化し計画に活かす住民参加型 GIS(PPGIS)の研究は主に人文地理学で蓄積がある¹⁵⁾¹⁶⁾。Brown & Raymond は、景観価値の認識が高くなる程、地域愛着が高まることを示している¹⁷⁾。また PPGIS のレビュー論文では、半島や地域全体等比較的広域な範囲を対象とする住民の価値認識の傾向や一定期間 2 時点の景観価値の変化の調査により、景観価値の重要性や空間分布の時間変化の安定性が示されている一方、開発や土地利用の変化の影響可能性や、時間軸への縦断的研究が少ないことが指摘されている¹⁸⁾¹⁹⁾。本研究は PPGIS 研究としては、地方都市中心市街地という PPGIS として比較的狭域かつ細やかな開発や土地利用の変化が蓄積した範囲に対し、都市形成史の分析と PPGIS を組み合わせ、現代の地域住民の景観価値認識と各場所の時間軸の関係を考察することを試みる点に特徴がある。

表-1 文献調査に用いた主な資料

著者・編者	発行年	名称
今治市	1943	今治市誌
今治市誌編さん委員会	1974	新今治市誌
愛媛県史編さん委員会 編	1986	愛媛県史 地誌II (東予西部)
今治市商工会議所	1984	今治商工会議所八十年史
今治郷土史編さん委員会	1990	今治郷土史第9巻
建設省	1959	戦災復興誌
今治郷土史編さん委員会	1990	現代の今治
今治市	-	市役所提供資料(自治会の範囲・名称について)

表-2 ヒアリング調査の概要

日時	対象	属性	選定理由	内容
2025.8.8	I	元商店街組合理事長 前美須賀地区自治会長	自治会と商店街組合双方の空間的範囲や関わりを聞くため	現在の自治会、商店街組織の範囲や活動について
	II	旧おみさん会立ち上げメンバー	戦後の商店街組織の活動を補足的に聞くため	
	III	美須賀コミュニティプラザ館長	現在の3つの地区自治会の活動について聞くため	
2025.8.26	IV	商店街協同組合理事長	商店街協同組合の加盟店舗の範囲や活動内容を聞くため	商店街組織の範囲や活動について
2026.3.10	V	吹揚神社宮司様	地域性や歴史の認識に影響する伝統行事について歴史や現在の状況を聞くため	春祭りをはじめとする伝統行事について

表-3 各年代の都市空間データのベースとして使用した地形図

時期	地図種別	図名	測量年	発行年
近世	2.5万地形図	越智郡	1889(明22、明29製版)	1896(明29)
明治から戦前	2.5万地形図	今治東部	1928(昭3)	1931(昭6)
	2.5万地形図	今治西部	1928(昭3)	1931(昭6)
戦後	2.5万地形図	今治東部	1969(昭44)	1971(昭46)
	2.5万地形図	今治西部	1969(昭44)	1970(昭45)
近年	2.5万地形図	今治東部	1985(昭60)	1987(昭62)
	2.5万地形図	今治西部	1985(昭60)	1987(昭62)

表-4 各年代の都市空間データで参照した地図資料

時期	参照地図	対象施設・地物
近世	1699(元禄12)年の間寸改帳による町割図	町名
	1880(明治13)年頃の越智郡地図	市街地の様子
明治から戦前	1920(大正9)年の今治市全図、1923(大正12)年の今治市街全図	官公施設、工場・会社
	1909(明治42)年の伊豫今治町全図	田んぼ
戦後	今治復興都市計画図 (戦災復興誌第7巻掲載)	復興都市計画道路
	1953(昭和28)年の日本商工業明細図今治市・波止浜町、1960(昭和35)年の今治市鳥瞰図	官公施設、工場・会社
近年	1970(昭和45)年のゼンリン住宅地図、1985(昭和60)年のゼンリン住宅地図	官公施設、工場・会社、大型デパート

(4) 研究構成と研究手法

本研究は都市形成過程の分析(第2章)、地域住民の環境認識への影響が想定される地域組織と地域活動等の調査(第3章)、PPGIS を援用した地域住民の景観価値認識の調査(第4章)、考察(第5章)で構成される。都市形成過程と地域組織に関する文献調査(表-1)と、地域組織地域活動の補足的なヒアリング調査(表-2)をおこなった。都市形成過程について、後述する考察より設定した4年代に対応する旧版地形図(表-3)をGISに取り込みベースマップを作成した上で、文献調査による各年代の資料(表-4)を参照して公共施設、商業等の空間的情報を加筆し都市空間データを作成した。地域組織地域活動に関するヒアリング調査は、表-2に示すように自治会と商店街の重なりや活動内容、近年の伝統行事など文献調査では把握できなかった内容に詳しい人物に対し実施した。景観価値認識の調査では、PPGISの手法を用いて中心市街地に対する地域住民の景観価値の認識についてアンケート調査を実施した。最後に都市形成過程と地域組織地域活動、景観価値の認識の関係について考察した。

2. 今治市中心市街地の都市形成過程

作成した都市空間データを図-2に示す。都市形成過程分析

の区分として、文献調査に基づき、今治城築城以降中心市街地の基礎が形成された「近世」、商工業の発展と市街地の拡大がみられた「明治から第二次世界大戦前（以下：明治～戦前）」、戦災復興から高度経済成長期の商業機能の変化がみられた「第二次世界大戦後から高度経済成長期まで（以下：戦後～高度経済成長期）」、郊外化やしまなみ海道開通による定期旅客航路の減少により中心市街地の都市機能が低下した「1980 年代後半から現代（以下：現代）」の4 期に分けた。以下、各時期の都市形成過程とそれに関連する出来事について示す。

(1) 近世の今治市中心市街地

1602(慶長 7)年の藤堂高虎の今治城築城に伴い、その翌年から今治城北側に城下町の町割りが始まった。海岸線と並行に、東側から片原町、中浜町、風早町、本町、米屋町、室屋

町の6 町(以下：今治 6 町)が形成された。その北側に十数寺が配された(寺町)。城下町西側には中世から南光坊、別宮大山祇神社があった。享保年間には繊維工業が商業化された。

(2) 明治～戦前の今治市中心市街地

1872(明治 5)年、今治城が取り壊され吹揚神社が建設された。1889(明治 22)年以降の複数回の市町村合併により 1920(大正 9)年、今治市が誕生した。近世以降市街地の拡大は南北方向であったが、1924(大正 13)年の JR 予讃線開通、1922(大正 11)年の開港場指定により、駅と港を結ぶ東西方向の市街化が進み、両者をつなぐ今治停車場線(広小路)も整備された。

繊維工業について、1886(明治 19)年綿ネルの製造を開始、日清戦争後生産が増大し今治港の出入貨物量が増加した。1922(大正 11)年に今治港は四国唯一の開港場として認可され、

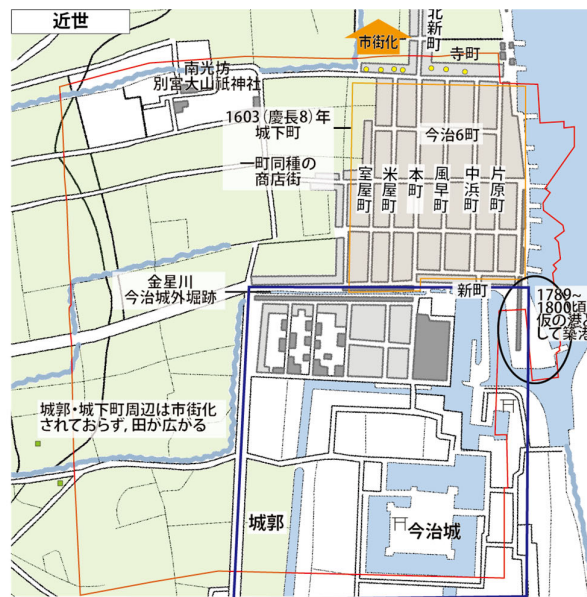
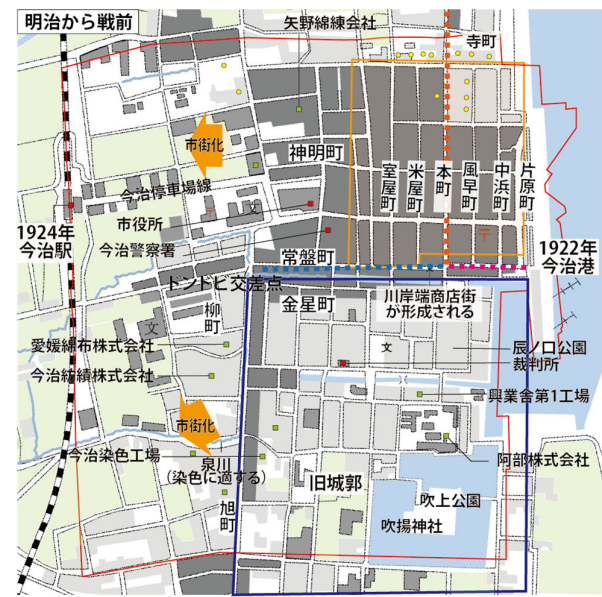


図2 近世から現代までの中心市街地の変化の都市空間データ(旧版地形図をトレースし、既存地図を参考に筆者作成)

翌年には本格的な港利用が開始された²⁰⁾。

商業について、明治に入り中心市街地の商店の数が増加し、現在の今治銀座の前身となる川岸端商店街が形成された。その後も国鉄の開通、築港の完成等により市街地が拡大した。

(3) 戦後～高度経済成長期の今治市中心市街地

第二次世界大戦の空襲により中心市街地のほぼ全範囲が焼失した。戦災復興土地区画整理事業では、旧今治 6 町の構成を維持するかたちで街路幅員の拡幅や整形化がおこなわれた²¹⁾。駅と港を結ぶ広小路は幅員 20 間(36m)に拡幅された。広小路の先には丹下健三設計による公共施設群(今治市役所、今治市公会堂、今治市民会館)が建設された。

繊維工業について、1955(昭和 35)年今治市のタオル生産量が日本一となった。今治港は大きな戦災被害はなかったが、今治市の経済復興に伴う造船業のスピード化大型化から港湾施設拡張の必要性が高まり、市は倉庫等の施設の充実に力を入れた。1962(昭和 37)年には、中心市街地北部の波止浜港が今治港域に編入され、受け入れ態勢が整えられた。

商業について、戦災で主要な商店街が焼失したが、戦災復興区画整理により新町と川岸端が一体で整備され今治銀座と呼ばれた。その後自家用車での来客が増加し、1958(昭和 33)年以降、今治センター等の大型店が出店しはじめた。

(4) 現代の今治市中心市街地

1980(昭和 55)年今治城(図-3)が再建された。自家用車の普及、郊外化の進展等により、中心市街地の公共交通の利用者が減少し始めた。1999(平成 11)年に瀬戸内しまなみ海道が開通すると、今治港の定期旅客航路が廃止され、港利用者が減少した²²⁾。それに伴い港から駅へ向かう人通りが減少、2008(平成 20)年までに全ての大型店が撤退し、商店街もシャッターが閉まる店舗が目立つようになった。大型店舗跡地の一つは民間企業により多目的広場(芝っち広場)として活用されている²³⁾。

今治港では 2007(平成 19)年“「交通」の港から「交流」の港”をコンセプトにみなと再生事業が推進され、2016(平成 28)年海のコンコースとみなと交流施設「はーばりー」が整備された²⁴⁾(図-5)。近年今治銀座商店街、新町商店街には少しずつ新規出店舗がみられる。

(5) 今治市中心市街地の都市形成過程の特徴

以上、旧今治 6 町を基礎とする戦災復興土地区画整理事業や今治城の再建などがみられた一方、近代化での駅と港を結ぶ東西方向の市街化や戦災復興による広小路再整備による商店街の分断など、大きな空間的変化(空間的な文脈の断絶)が確認された。中心市街地は、近世城下町と戦災復興以降の近代都市計画が重なり、形成時期が異なる場所やエリアが共存している。

3. 今治市中心市街地の現在の地域組織と地域活動

(1) 自治会組織・商店街組織の構成と活動

現在中心市街地の地域組織では、地区自治会と単位自治会が階層的に存在する。地区自治会は小学校区と対応し、中心市街地の小学校は 2015(平成 27)年 4 月に吹揚小学校に統合されたが、旧小学校区を単位とする美須賀自治会、今治自治会、日吉自治会がある。一部自治会は文化祭、敬老会、盆踊り等の行事

を行っている。かつては各地区自治会の婦人会が行事運営の役割を担っていたが、近年高齢化による担い手不足で開催が困難となっている(I、II、III)。単位自治会は美須賀自治会内に 34、今治自治会内に 40、日吉自治会内に 43 あり、行事などは行われていないが回覧板、広報誌配布、ごみ収集等生活に関わることを担っている(III)。

中心市街地の本町商店街、今治銀座商店街、新町商店街の営業店舗で構成される組織としては、今治商店街協同組合と今治商店連盟(2004 年設立)がある(IV)。

(2) 現在行われている伝統行事と地域活動

伝統行事のうち近世から続くものとして、毎年 5 月 10、11 日に中心市街地の吹揚、大山祇を含む今治全体の神社で一斉に宮出しが催される春祭りがある。吹揚神社の春祭りは吹揚神社と氏子の住民で構成される今壺会で運営されている(V)。今壺会是他神社の祭礼行事にも参加している。また中心市街地の商店街周辺では、伝統行事の継承や子供達の体験、中心市街地の賑わい創出のため、今壺会が 15 年前からかつてあった亥の子という行事を行っている(V)。

中心市街地のまちづくりに関連する地域活動として、現在今治銀座商店街で土曜夜市、日曜朝市が定期的に開催されている。海のコンコースでは 2022(令和 4)年から月に 2 回「せとうちみなとマルシェ」が開催されている。広小路や今治銀座では夏に市民主体のイベント「おんまぐ」がおこなわれている。

4. 中心市街地の景観価値認識

(1) アンケート調査の概要

都市形成過程、地域組織、地域活動の調査を踏まえ、PPGIS による景観価値のアンケート調査をおこなった。既往研究¹⁵⁾¹⁷⁾を参照し、今治市中心市街地の土地利用状況や今後のまちづくりへの展開と回答しやすさを考慮して、美的価値、歴史的価値、社会的価値、経済的価値、娯楽的価値、将来的価値を選定した(表-5)。質問項目は景観価値の認識とその場所、理由に加えて、影響要素として回答者の年代、所属自治会、地域活動運営への参加の有無等を設定した。各景観価値を示すシール各色 4 枚(計 24 枚)と地図を記載した解答用紙を配布し、景観価値を認識する場所へのシールの貼付、場所の名称、景観価値の理由の自由記述の回答を要請した。必要回答数は都市計画上の中心市街地 3,052 世帯に対し式(1)により算出した。回収率を 20%と仮定し各町の世帯数を考慮して層化抽出法の比例割当に基づき、1,786 部を無作為抽出した住戸に配布、返信用封筒にて回収した。

$$n \geq \frac{N}{\left(\frac{e}{k}\right)^2 \frac{N-1}{P(1-P)} + 1} \quad (1)$$

n:必要回答数、N:母集団の大きさ、e:標本誤差の許容水準、k:信頼度に対応する正規分布点、P:予想される母集団の比率である。標本誤差の許容水準 e を 5%、信頼度を 95%、予想される母集団の比率 P を 0.5 とした。

(2) アンケート回答の概要

アンケート回答の概要と属性分析の主な結果を表-6に示す。回収率が仮定を下回ったが回答者に同等の作業を依頼した既

往研究と近い結果となった^{29,26)}。また性別、年代、所属自治会と各景観価値のシール数（認識の数）、価値類型の傾向に有意な差異はみられなかった。地域活動運営の参加有無と景観価値の認識の数については分散分析（TypeIII平方和）の結果、参加有の認識の数が有意に多かった（ $p<0.05$ ）が、価値類型の傾向には有意な差はみられなかった。

各回答に貼付されたシールと同地点に ArcGISPro 上でポイントデータとして入力し可視化した（図-3）。入力の際、記述された場所名・理由が明記され、位置が明らかに異なる場合のみ、他の回答と重ならない対象施設の範囲内に修正した。

各景観価値の認識の理由に関する自由記述の内容について、既往研究を参照した上で²⁷⁾本調査の目的に合わせ基準を設定し、「経験の理由」と「意味の理由」に分類した。分類は下記の基準を明確にした上で2名の合議により決定した。

1. 「経験の理由」：時空の特定が可能、回答者の具体的行動、エピソード、直接的な感性（きれい、心地よい等）、主観的感情（懐かしい、楽しかった等）を含む記述。
2. 「意味の理由」：名称、事実、機能、定義、客観的評価、将来への展望を含む記述。

例えば今治港に対し「しまなみ海道がとてもきれいに見えるから」は経験、「四国一古い開港場だから」は意味に分類した。

各景観価値と理由の種類（経験または意味）の傾向を把握するため、独立性の検定（カイ二乗検定）をおこなった。その結果（表-7）、6種類すべてにおいて、景観価値類型と理由の種類の

間に極めて有意な関係がみられた（ $p<0.001$ ）。調整済み標準化残差の算出の結果、美的価値、娯楽的価値は経験の理由が有意に多く、特に美的価値（ $z=13.43$ ）は非常に多かった。歴史的価値、社会的価値、経済的価値、将来的価値は意味の理由が有意に多く、特に歴史的価値（ $z=6.12$ ）、経済的価値（ $z=6.69$ ）が多かった。

先述の地域活動と認識の数の関係については、地域活動運営への関わりが、地域理解を通して価値認識に影響している可能性が考えられる。一方、景観価値認識の理由について、春祭りや亥の子など伝統行事に関する経験の理由はみられなかった。

(3) 景観価値の分布の傾向

図-3 より、面的な広がりはありませんが、場所ごとに点的な景観価値の貼付位置の偏りがみられた。偏りがあつた場所として、今治城周辺、南光坊・別宮大山祇神社、今治港周辺（はーばりー）、市役所、公会堂、公園、今治国際ホテル、今治駅等が挙げられる。また今治銀座商店街には線上に分布した。

場所ごとの各景観価値をみると、美的価値は今治城周辺、今治港周辺、ケヤキ並木等、歴史的価値は今治城周辺、南光坊・別宮大山祇神社、寺町等、社会的価値は今治銀座商店街、今治国際ホテル、はーばりー、芝っち広場等、経済的価値は市役所周辺、今治国際ホテル、八木酒造部等、娯楽的価値は各公園、将来的価値は今治城、今治港、公会堂等に集中している。

(4) 都市機能の形成時期と景観価値の認識の関係

既往研究²⁸⁾から、歴史的に都市の空間特性を捉える際には具体的建造物ではなく、土地利用など各場所の都市機能からみた特徴を捉えることが重要と考え、各景観価値が示された場所について、都市形成史の分析に基づき各場所がもつ都市機能の形成時期の整理をおこなった。都市形成過程の整理を基に、景観価値が認識された各場所の都市機能の形成時期を近世、明治～戦前、戦後～高度経済成長期、現代に分類し、1,616 個の景

表-5 アンケート調査で設定した景観価値の定義

景観価値	景観価値の選択理由に用いた説明文
美的価値	魅力ある景色や眺め、香り、音などがあると感じる場所
歴史的価値	重要な歴史を感じる場所
社会的価値	人々の交流の機会を提供していると感じる場所
経済的価値	働く場所やお金を稼ぐ場所を提供し、地元の産業・経済を支えていると感じる場所
娯楽的価値	遊ぶのに適していると感じる場所
将来的価値	将来の世代に今の地域のことを知り、経験してもらえと感じる場所

表-6 アンケート回答の概要と属性分析の主な結果

項目	取得データ	属性分析の主な結果
有効回答数	213 名 シール総数 1616 個 (平均 7.59 個)	—
性別	男性 97 名、女性 115 名、未回答 1 名	性別とシール数の関係：有意差なし 性別と価値類型の関連：有意差なし
年代	10 代 2 名、20 代 8 名、30 代 9 名、40 代 33 名、50 代 37 名、60 代 45 名、70 代以上 79 名	年代とシール数の関係：有意差なし 年代と価値類型の関連：有意差なし
所属自治会	今治 47 名、美須賀 54 名、日吉 44 名、わからない 35 名、所属していない 24 名、未回答 9 名	自治会とシール数の関係：有意差なし 自治会と価値類型の関連：有意差なし
地域活動運営	参加 40 名、不参加 163 名、未回答 10 名	参加とシール数の関係：有意差あり 参加と価値類型の関連：有意差なし

各属性とシール数の関係性は TypeIII 平方和の分散分析、景観価値類型の偏りは構成比の比較と独立性の検定と調整済み標準化残差分析の統計分析を実施して確認した。

表-7 理由の種類による景観価値類型の数と調整済み標準化残差

	経験	意味	総数
美的価値	274 [13.43]**	107 [-13.43]**	381
歴史的価値	104 [-6.12]**	263 [6.12]**	367
社会的価値	144 [-2.09]*	239 [2.09]*	383
経済的価値	26 [-6.69]**	128 [6.69]**	154
娯楽的価値	100 [3.32]**	87 [-3.32]**	187
将来的価値	34 [-4.73]**	110 [4.73]**	144
総数	682	934	1616

セル内 1 段目から美観的価値、調整済み標準化残差の濃淡は有意水準を示す。赤はプラス、青はマイナスを示し、濃色： $p<0.01$ (1%有意)、淡色： $p<0.05$ (5%有意)、 $p<0.001$ (**): $p<0.01$ ($z>2.58$)、*: $p<0.05$ ($z>1.96$)

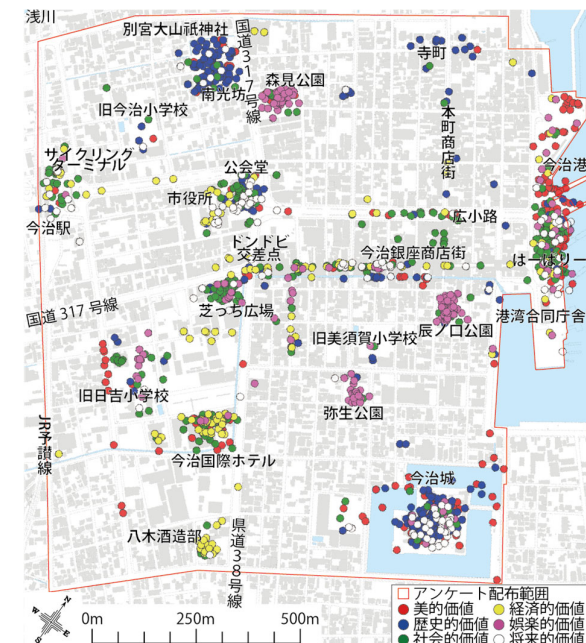


図-3 景観価値の付置状況(1616 個)

観価値の各場所と都市機能の形成時期の対応を整理した(表-8)。今治港と臨港地区内に整備されたは一ばりーの区別については、価値認識の場所名に、は一ばりーを含むものを現代、今治港のみ記載された回答を戦前に分類した。整理した都市機能の形成時期と各景観価値についてカイ二乗検定をおこなった結果、半数以上の項目において極めて有意な偏りがみられた(表-9)。さらに各類型で特にどの時期に差異がみられるか明確にするため多重比較(Holm 法)をおこなった(表-10)。その結果、全景観価値において形成時期ごとに差異があることが明らかになり、特に歴史的価値、社会的価値、娯楽的価値には大きな差異がみられた。

この結果に影響を与えたと考えられる、各形成年代で景観価値が多く認識された場所(各形成年代上位2箇所)ごとに、景観価値類型の数と調整済み標準化残差、および多重比較(Holm 法)をおこなった(表-11、表-12)。以下、各形成年代とそれに影響したと考えられる各場所の景観価値の特徴、および都市機能の関係について考察する。なお()内は、各対象の全景観価値に対する割合と調整済み標準化残差 z を示す。

a) 近世以前の形成場所の景観価値

近世以前に形成された場所について、全体としては、歴史的価値(52.5%、 $z=19.35$)と美的価値(28.3%、 $z=3.03$)が有意に多く、社会的価値(5.3%、 $z=-11.79$)、経済的価値(3.7%、 $z=-5.38$)、娯

表-8 景観価値が認識された各場所の都市機能の形成時期

	主な場所(シール数)
近世	今治城(336)、南光坊・別宮大山祇神社(119)、八木西造船(20)、寺町(13)、本町(11)、室屋町1丁目、青野砲臺の建物、片原町等
明治～戦前	今治港(126)、今治銀座商店街(91)、辰ノ口公園(56)、今治駅(28)、ドンドロ交差点(25)、金星川(19)、旧日吉小学校(13)、ラジウム温泉(8)、旧美須賀小学校(2)、吹揚神社(3)、藤高タカ(2)、泉川、泉川染色場跡等
戦後～高度経済成長期	公会堂(76)、森見公園(56)、市役所(40)、弥生公園(37)、広小路(26)、市民会館(6)、ケヤキの並木道(11)、愛媛信用金庫(3)、警察署(2)、VISAGE ビル等
現代	は一ばりー(163)、今治銀座ホテル(95)、芝っ広場(73)、サイクリングターミナル(27)、片原海岸公園(25)、中央住民センター(6)、日吉公園(7)、吹揚小学校(6)、地場産業センター(3)、美須賀コミュニティプラザ(2)、ホホホ座、今治公民館等

※アンケート結果から都市形成史上および価値認識の傾向に特徴がみられた場所を抜粋

表-9 形成時期による景観価値類型の数と調整済み標準化残差

	近世以前	戦前	戦後	1980年～近年	総数
美的価値	144 [3.03]**	90 [-1.05]	40 [-3.75]**	107 [1.03]	381
歴史的価値	267 [19.35]**	57 [-5.06]**	37 [-3.90]**	6 [-12.12]**	367
社会的価値	27 [-11.79]**	92 [-0.85]	61 [-0.51]	203 [13.76]**	383
経済的価値	19 [-5.38]**	52 [2.41]*	28 [0.49]	55 [2.87]**	154
娯楽的価値	11 [-8.02]**	77 [5.16]**	66 [7.21]**	33 [-2.78]**	187
将来的価値	41 [-0.82]	47 [2.00]*	39 [3.47]**	17 [-4.08]**	144
総数	509	415	271	421	1616

セル内1段目から実測値、調整済み標準化残差
着色の濃淡は有意水準を示す。赤はプラス、青はマイナスを示し、濃色： $p<0.01$ (1%有意)、淡色： $p<0.05$ (5%有意)、 $p<0.01$ **： $p<0.01$ ($p>2.58$)、*： $p<0.05$ ($p>1.96$)

表-10 各景観価値類型の形成時期別比率の多重比較

	近世以前 (n=509)	戦前 (n=415)	戦後 (n=271)	1980年～近年 (n=421)
美的価値	28.3%(a)	21.7%(ab)	14.8%(b)	25.4%(a)
歴史的価値	52.5%(a)	13.7%(b)	13.7%(b)	1.4%(c)
社会的価値	5.3%(c)	22.2%(b)	22.5%(b)	48.2%(a)
経済的価値	3.7%(b)	12.5%(a)	10.3%(a)	13.1%(a)
娯楽的価値	2.2%(c)	18.6%(a)	24.4%(a)	7.8%(b)
将来的価値	8.1%(b)	11.3%(ab)	14.4%(a)	4.0%(c)

※総値は各形成時期における平均比率を示す。カッコ内アルファベットは価値類型ごとの形成時期の多重比較(Holm 法による補正済み比率の差の検定)をおこなった結果を示し、異なるアルファベット間において $p<0.05$ で有意差がある。(a)>(b)>(c)で有意に比率が高いことを示す。例えば、美的価値において、同一行内の(a)は、近世以前・戦前・近年の間で有意差があることを示している。

楽的価値(2.2%、 $z=-8.02$)が有意に少なかった。近世以前に形成された場所はその歴史的長さから歴史的価値が認識されやすいが、各場所の本来の都市機能を実感する機会が少なく、社会的、経済的、娯楽的価値は認識されづかった可能性がある。

景観価値が多く認識された場所は、今治城、南光坊・別宮大山祇神社等であった。今治城は計336の景観価値(美的価値、歴史的価値、社会的価値、娯楽的価値、将来的価値)が認識され、美的価値(36.6%、 $z=3.86$)、歴史的価値(46.7%、 $z=9.51$)が多く、社会的価値(3.9%、 $z=-9.66$)、娯楽的価値(3.3%、 $z=-3.71$)は少なかった。美的価値の理由では、経験の理由(87/123)が多く、今治城からの景色に関する記述が多くみられた。再建後のシンボル性に加え、再建前後の日常の眺めや行事参加など、幅広い経験に基づく認識が指摘されたと考えられる。

南光坊・別宮大山祇神社は計119の景観価値(美的価値、歴史的価値、社会的価値、将来的価値)が示され、歴史的価値(75.6%、 $z=12.12$)が多く、美的価値(13.4%、 $z=3.91$)や社会的価値(5.0%、 $z=-4.59$)が少なかった。歴史的価値では四国八十八ヶ所であることなど意味による理由が多かった(71/91)。40代以上では子供の頃の遊び場としての経験の理由も指摘されたが、近年日常利用が少なくなっていることの影響が考えられる。

一方、城下町として城と同時期に形成され、戦災復興事業でも再建された今治6町は、その歴史性に対し景観価値の認識が少なかった。これは近年本町商店街をはじめエリアの商業機能の低下により地域住民の来訪機会や経験が少なく、景観価値を有する場所として想起されなかった可能性が考えられる。

b) 明治～戦前の形成場所の景観価値

明治から戦前に形成された場所について、全体としては、娯楽的価値(18.6%、 $z=5.16$)と、経済的価値(12.5%、 $z=2.41$)、将来的価値(11.3%、 $z=2.00$)が有意に多く、歴史的価値(13.7%、 $z=-5.06$)が有意に少なかった。特に娯楽的価値は辰ノ口公園の価値認識の影響が大きいと考えられる。

景観価値が多く認識された場所は、今治港、今治銀座商店街であった。今治銀座商店街は計91の景観価値(6種類全て)が認識され、社会的価値(40.7%、 $z=4.97$)、経済的価値(22.0%、 $z=6.33$)、将来的価値(17.6%、 $z=3.00$)が特に有意に多かった。理由として、かつてのにぎわいに関する記述に加え、近年の新規出店舗や、土曜夜市、おんまぐといった行事や取り組みに対しての記述がみられた。

今治港は計126の景観価値(6種類全て)が認識され、美的価値(49.2%、 $z=5.41$)が多く、経験による理由が多かった(46/62)。定期旅客航路があった頃の回想に基づく社会的価値や美的価値の認識や、港から発展した海軍都市としての今治の歴史に基づく歴史的価値の記述がみられた。今治港に対しては1種類の価値の指摘が多い中(67.4%)美的価値が最も多く、2種類以上の場合も美的価値を含めて社会的価値や将来的価値を認識する傾向がみられた。これは後述するように、せとうちみなとマルシェの定期開催等近年のイベントによる来訪機会や今治港を眺める経験の増加が影響し、美的価値を中心に、社会的価値、将来的価値が認識されたと考えられる。

c) 戦後～高度経済成長期の形成場所の景観価値

戦後から高度経済成長期に形成された場所について、全体としては娯楽的価値(24.4%、 $z=7.21$)、将来的価値(14.4%、 $z=3.47$)が有意に多く、歴史的価値(13.7%、 $z=3.90$)、美的価値(14.8%、 $z=3.75$)が有意に少なかった。景観価値が多く認識された場所は、公会堂、森見公園であった。丹下健三設計の建築(市役所、市民会館、愛媛信用金庫等)に多くの景観価値が認識されたが、特に多かった公会堂には、計76の景観価値(美的価値、歴史的価値、社会的価値、経済的価値、将来的価値)が認識され、社会的価値(40.8%、 $z=4.53$)、将来的価値(23.7%、 $z=4.65$)が多く示された。また戦後に形成された場所だが、今治城の次に歴史的価値が多かった。丹下建築としての意味による理由により、社会的価値や、将来的価値が多く示され、加えて子供の発表会、音楽会など経験による理由から、社会的価値が指摘されたことで、他の丹下建築に比べ多くの景観価値が示された。

森見公園は(1972(昭和47)年整備)には、計56の景観価値(美的価値、社会的価値、娯楽的価値)が認識され、娯楽的価値(62.5%、 $z=16.15$)が半数以上を占め、有意に多かった。子供の遊び場や花見といった公園としての日常利用に関する、経験による理由が指摘された。整備以降、現在に至るまで公園としての利用されてきたことが影響したと考えられる。

d) 現代の形成場所の景観価値

高度経済成長期以降から近年に形成された場所について、全体としては、社会的価値(48.2%、 $z=13.76$)、経済的価値(13.1%、 $z=2.87$)が有意に多く、歴史的価値(1.4%、 $z=-12.12$)、娯楽的価値(7.8%、 $z=-2.78$)、将来的価値(4.0%、 $z=-4.08$)は有意に少なかった。

表-11 各形成時期の代表地点×景観価値類型

	今治城 (近世)	南光坊 別宮 (近世)	今治 銀座 (戦前)	今治港 (戦前)	公会堂 (戦後)	森見 公園 (戦後)	国際 ホテル (近年)	はーばりー (近年)	総数
美	123 [3.86]**	16 [-3.91]**	2 [-5.85]**	62 [5.41]**	5 [4.43]**	11 [-1.54]	27 [0.07]	59 [2.29]*	289
歴史	157 [9.51]**	90 [12.12]**	6 [-4.50]**	12 [4.64]**	21 [0.05]	0 [-4.55]**	0 [-6.07]**	5 [-7.36]**	201
社会	13 [-9.66]**	6 [-4.59]**	37 [4.97]**	21 [-1.25]	31 [4.53]**	10 [-0.57]	35 [4.11]**	68 [7.32]**	215
経済	0 [-6.05]**	0 [-3.09]**	20 [6.33]**	5 [-1.24]	1 [-1.92]	0 [-2.04]*	30 [10.51]**	13 [0.85]	69
娯楽	11 [-3.71]**	0 [-3.35]**	10 [1.32]	12 [0.91]	0 [-2.61]**	35 [16.15]**	3 [-1.71]	9 [-1.08]	80
将来	32 [0.39]	7 [-1.29]	16 [3.00]**	14 [0.87]	18 [4.65]**	0 [-2.44]*	0 [-3.25]**	9 [-1.73]	89
将来 総数	336 (66.0%)	119 (23.4%)	91 (21.9%)	126 (30.4%)	76 (28.0%)	56 (20.7%)	95 (22.6%)	163 (38.7%)	943

セル内1段目から美観値、期待度数、調整済み標準化残差、総数の0内は各形成年代のサンプル数を占める割合を示す。
着色の濃淡は有意水準を示す。赤はプラス、青はマイナスを示し、濃色: $p<0.01$ (1%有意)、淡色: $p<0.05$ (5%有意)、 $p<0.001$: $p<0.01$ ($z>2.58$)、*: $p<0.05$ ($z>1.96$)

表-12 各形成時期の代表地点別比率の多重比較結果

	今治城 (近世)	南光坊 別宮 (近世)	今治 銀座 (戦前)	今治港 (戦前)	公会堂 (戦後)	森見 公園 (戦後)	国際 ホテル (近年)	はーばりー (近年)
美	123 (36.6%) [ab]	16 (13.4%) [c]	2 (2.2%) [d]	62 (49.2%) [a]	5 (6.6%) [a]	11 (19.6%) [c]	27 (28.4%) [bc]	59 (36.2%) [ab]
歴史	157 (46.7%) [a]	90 (75.6%) [a]	6 (6.6%) [c]	12 (9.5%) [c]	21 (27.6%) [b]	0 (0.0%) [d]	0 (0.0%) [d]	5 (3.1%) [c]
社会	13 (3.9%) [d]	6 (5.0%) [d]	37 (40.7%) [a]	21 (16.7%) [bc]	31 (40.8%) [a]	10 (17.9%) [bc]	35 (36.8%) [ab]	68 (41.7%) [a]
経済	0 (0.0%) [c]	0 (0.0%) [c]	20 (22.0%) [b]	5 (4.0%) [bc]	1 (1.3%) [bc]	0 (0.0%) [c]	30 (31.6%) [a]	13 (8.0%) [bc]
娯楽	11 (3.3%) [b]	0 (0.0%) [c]	10 (11.0%) [b]	12 (9.5%) [c]	0 (0.0%) [c]	35 (62.5%) [a]	3 (3.2%) [bc]	9 (5.5%) [b]
将来	32 (9.5%) [ab]	7 (5.9%) [bc]	16 (17.6%) [a]	14 (11.1%) [ab]	18 (23.7%) [a]	0 (0.0%) [c]	0 (0.0%) [c]	9 (5.5%) [bc]

※数値は各地点における期待比率を示す。カッコ内アルファベットは価値類型ごとの形成時期の多重比較(Holm 法による補正済みの比率の差の検定)をおこなった結果を示し、異なるアルファベット間において $p<0.05$ で有意差がある。(a)-(b)-(c)-(d)で有意に比率が高いことを示す。

た。みなと交流施設は一ぱりー、国際ホテル、芝っ広場など、地域の交流や経済活動を担う施設に対し、社会的価値や経済的価値が認識された結果と考えられる。

景観価値が多く認識された場所は、はーばりー、今治国際ホテルであった。はーばりー(2016(平成28)年開業)には、計163の景観価値(6種類全て)が認識され、社会的価値(41.7%、 $z=7.32$)、美的価値(36.2%、 $z=2.29$)が多かった。はーばりーの社会的価値の理由は経験、意味が両方みられ、美的価値の理由は経験による理由(48/59)が多く、施設内から見た港の景色に関する記述が多かった。これはせとうちみなとマルシェ等により今治港への来訪機会やその際ははーばりーから今治港を眺める体験が増えたことが影響したと考えられる。これらは先述の通りはーばりーが位置する今治港の景観価値の認識にも影響している可能性がある。

今治国際ホテル(1996(平成8)年開業)は、計95の景観価値(美的価値、社会的価値、経済的価値、娯楽的価値)が認識され、社会的価値(36.8%、 $z=4.11$)、経済的価値(31.6%、 $z=10.51$)が有意に多かった。ビジネス利用に加え同窓会など、幅広い世代の交流の場として利用されていることが影響し、経験による理由から多くの景観価値が示されたと考えられる。

5. 今治市中心市街地の景観価値認識の考察

まず社会特性と景観価値の関係について、表-6に示した通り、性別、年代、所属自治会と認識の数、価値類型の傾向に有意な差異はみられなかった。地域活動の参加の有無と景観価値の認識の数には関係性がみられたが、特定の景観価値類型への有意な偏りはみられなかった。また自治会や伝統行事など地域固有の社会特性に起因する景観価値の認識の差や明確な価値認識の理由もみられなかった。この要因として、一部自治会での行事の継続がみられたものの、多くの地域組織では担い手不足により活動の継続が難しくなっており、地域組織の活動を通して特定のエリアの世代間で歴史的な景観価値を共有するような機会は失われてきていることが考えられる。これは既往研究において、今治市でシビックプライドの要素としての地域アイデンティティと忠誠的愛郷心は抽出されなかったと指摘されていることから¹²⁾、近年の継続的な状況と考えられる。

次に空間特性と景観価値の関係について、都市形成史の整理から、近世城下町を基盤としつつも近代化における都市計画や戦災復興等による都市空間の変化(空間的な文脈の断絶)が確認された。景観価値が点的に認識された場所を形成年代ごとに整理した結果、年代別に景観価値の特徴が比較的明確に表れた。これは形成年代の異なる各場所の都市機能が地域住民の個々の活動や経験がつながり、現代の景観価値認識に結びついたものと考えられる。またその詳細をみると、今治城や今治港では、形成時の都市機能の変化が多層的な景観価値の認識につながっていると考えられる。また現代の活動の経験を契機にその場所の意味や歴史的価値が認識されるケースもみられた。また南光坊・別宮大山祇神社や森見公園のように一貫して形成時の都市機能を果たすことが、特化した景観価値の認識に影響している場所もみられた。

	近世以前に形成			戦前に形成		戦後に形成		近年に形成		
	今治城 (336)	南光坊別宮 (119)	日今治 6 町 (11)	今治銀座 (91)	今治港 (126)	タオル工場 (4)	公会堂 (76)	森見公園 (56)	国際ホテル (95)	はーばりー (163)
近世以前	築城 ・軍事 ・行政	宗教 お遍路	城下町							
戦前	廃城 吹揚神社 ・城跡 ・行事		商店街 ・商業機能	川端岸商店街 今治銀座	開港場指定 ・物流 ・交通	繊維工業 跡地が残るところも				
戦後			戦災復興 再建				整備 ・交流 ・行事	整備 ・娯楽		
近年	再建 ・シンボル ・観光		・商業機能 の低下	おんまぐ 土曜夜市 ・娯楽 ・交流	しまなみ海道 定期航路廃止 再整備 再評価		改修		整備 ・観光 ・交流	みなと再生 はーばりー建設 マルシェ ・娯楽 ・交流
価値特徴	多層的 美的 (経): 城の 景色 歴史 (意): 歴史的 なシンボル性	単一的 歴史 (意): 中世 からの歴史性・ 四国八十八カ所	数が少ない	多層的 社会: おんまぐ等 経済: 商業空間 将来: 今後の可 能性への期待	多層的 美的 (経): 港の景色 歴史 (意): 古 い開港場	数が少ない	多層的 社会: ライフイベント 将来: 丹下建築	単一的 娯楽: 子どもの 遊び場	多層的 社会: 交流会場 経済: ビジネス・ 観光	多層的 美 (経): 港の景色 社会 (意): マルシェ

図-4 場所がもつ機能の変遷と景観価値の特徴

以上、特徴的な景観価値が認識される場所が共存している一方で、今治 6 町や繊維工業、大規模商業施設跡など、都市形成史上は重要な役割を果たしていたものの、現在その機能が衰退、喪失している場所は、経験に基づかない意味による理由や、歴史的価値も含めてあまり景観価値の認識が示されなかった。これは現在の地域住民の生活や体験との結びつきが薄く景観価値を有する場所として想起されづらかったためと考えられる。

以上より、今後今治市中心市街地の地域特性をいかしたまちづくりに向けては都市形成史上の各場所の意味を考慮しつつ、現代の取組みを通して、各場所での地域住民の経験を豊かにすることで、地域の場所の価値認識を高めていくことが大切であり、これは他地域にも展開可能な知見と考えられる。

<謝辞>

本研究は科研費 24K03218 の助成を受けたものである。本研究の文献調査の資料提供にいただいた今治市役所、今治城、今治史談会の方々、ヒアリング調査にご協力いただいた地域住民の方々に厚く謝意を表す。

【補注】

- (1) 本研究におけるアンケート調査は、法政大学内の研究倫理申請を承認の上、個人が特定されない形で論文に記載している。

【参考文献】

- 1) 今治市, 今治市中心市街地グランドデザイン, <https://www.city.imabari.chime.jp/miryokutosi/granddesign/>, 2026 年 3 月
- 2) 本多由佳, 土田寛, 小西千秋(2022), 「地方自治体の形成過程における地域の歴史的変容に関する研究-近世城下町を核に持つ地方自治体の中心地域に着目して-」, 日本建築学会計画系論文集, Vol.87, No.793, pp.557-565
- 3) 陳誠, 山口秀文(2025), 「明治期における兵庫津の都市空間の復元とその特徴に関する研究-兵庫津・北浜の地籍図と旧土地台帳の分析を通じて-」, 日本建築学会計画系論文集 Vol.90, No.828, pp.213-219
- 4) 国土交通省, 中心市街地活性化ハンドブック, <https://www.mlit.go.jp/toshi/contnet/001755128.pdf>, p.1-1, 2025 年 8 月
- 5) 国土交通省, 新たな「国土のグランドデザイン」(骨子), <https://www.mlit.go.jp/common/001033673.pdf>, p.4, 2025 年 8 月
- 6) Maria Lewicka(2011), "Place attachment: How far have we come in the last 40 years?", "Journal of Environmental Psychology", Vol.31, No.3, pp.207-230
- 7) Setha M. Low & Irwin Altman(1992), "Place attachment: a conceptual inquiry", "Journal of Environmental Psychology", Vol.21, No.3, pp.273-281
- 8) Lee K. Cerveny, Kelly Biedenweg, Rebecca McLain(2017), "Mapping Meaningful Places on Washington's Olympic Peninsula: Toward a Deeper Understanding of Landscape Values", "Environmental Management", Vol.60, No.3, pp.643-664
- 9) 宮脇勝(2012), 「歴史的景観キャラクター化に関する研究-鎌

倉市中心部の寺社・道路・街区・水路・土地利用の歴史的景観特性アセスメント」, 都市計画論文集, Vol.47, No.3, pp.607-612

- 10) 樋口秀, 仲条仁(2001), 「地方都市中心部の低未利用地の実態把握と有効活用方策の検討-屋外駐車場に着目した長岡市におけるケーススタディ-」, 第 36 回都市計画学会学術研究論文集, Vol.36, pp.433-438
- 11) 石河正寛, 村本美貴(2007), 「中心市街地活性化に向けた地域資源の活用に関する研究」, 都市計画論文集, No.42-3, pp.19-24
- 12) 伊藤香織(2017), 「都市環境のよさをシビックプライドを高めるか-今治市を事例とした実証分析-」, 日本都市計画学会都市計画論文集, Vol.52, No.3, pp.1268-1275
- 13) 千代章一郎, 関谷航(2015), 「丹下健三による今治市における市民広場の空間構成の変容」, 日本建築学会計画系論文集 Vol.80, No.715, pp.2121-2129
- 14) 千代章一郎, 関谷航(2015), 「丹下健三による今治市における市民広場の空間構成」, 日本建築学会計画系論文集 Vol.80, No.709, pp.717-725
- 15) Greg Brown, Christopher M. Raymond, Jonathan Corcoran(2015), "Mapping and measuring place attachment", "Applied Geography" Vol.57, p.42-53
- 16) Maarit Kahila-Tani, Anna Broberg, Marketta Kyttä & Taylor Tyger(2016), "Let the Citizens Map—Public Participation GIS as a Planning Support System in the Helsinki Master Plan Process", "Planning Practice & Research", Vol.31, No.2, pp.195-214
- 17) Brown, G. and Raymond, C. (2007), "The relationship between place attachment and landscape values: Toward mapping place attachment", "Applied Geography", Vol.27 (No.2), pp.89-111, Elsevier
- 18) Greg Brown, Delene Weber(2012), "Measuring change in place values using public participation GIS (PPGIS)", "Applied Geography" Vol.34, p.316-324.
- 19) Greg Brown, Pat Reed, Christopher M. Raymond(2020), "Mapping place values: 10 lessons from two decades of public participation", "Applied Geography", Vol.116, pp.1-8
- 20) 今治市, 今治港の歴史, 今治港の年表, https://www.city.imabari.chime.jp/kouwan/rekisi/nenpyo.html?utm_source=chatgpt.com, 2025 年 8 月
- 21) 今治市, 今治市の都市計画 2021, <https://www.city.imabari.chime.jp/tosisei/tosikeikaku2021/tosikeikaku2021.pdf>, 2025 年 8 月
- 22) 今治市, 西瀬戸自動車道(瀬戸内しまなみ海道), <https://www.city.imabari.chime.jp/douro/simanami/>, 2025 年 8 月
- 23) ドンドビジョン&芝っ広場, 芝っ広場について, <https://www.dondovision.com/what-shibacchi/>, 2026 年 1 月
- 24) 今治市, みなと再生事業概要, https://www.city.imabari.chime.jp/kouwan/minato_saisei/about.html, 2026 年 1 月
- 25) 福島秀哉, 白柳洋俊, 羽島剛史, 渡部哲史(2021), 「石垣島集落の空間的特徴と住民の地域認識の関係」, 住総研究論文集・実践研究報告集, No.48, pp.155-166
- 26) 橋本輝, 高力千紘, 中村省吾, 星野敏, 清水夏樹 (2015), 「能登半島の社会生態生産ランドスケープホットスポット評価、ランドスケープ研究 (オンライン論文集) Vol.8, pp.31-36
- 27) Tulving, E. (1972), "Episodic and semantic memory", Academic Press, New York, in Tulving, E. and Donaldson, W. (eds.), "Organization of Memory", pp.381-403, Academic Press, New York
- 28) Conzen, M.R.G.: Alhwick, Northumberland(1960), "Alhwick, Northumberland: A Study in Town-plan Analysis", The Royal Geographical Society, No.27, George Philip